現職教育にむけて

大戸　美也子

――今春、お茶の水女子大学で、保育に従事する現職者を主たる対象に、資質向上のため最新の専門知識や保育技術の学習機会を提供する新しい試みが始まりました。まず、この特設講座の概要について、簡単にご紹介いただけますか。

大戸　この講座の正式名称は、「お茶の水女子大学・アップリカ特設講座『チャイルド　ケア　アンド　エデュケーション―子ども幸せ学の探求―』」です。ご寄付をいただいているアップリカ葛西社は、大阪に本社のある育児・介護用品の開発・販売会社で、特にベビーカー、チャイルドシート、子守帯、ベッドなどの生産で高い実績があります。この会社の創業者である葛西健三氏(現　代表取締役会長)は、非常にユニークな方で、一九七〇年代後半より自ら「アップリカ育児研究会」を主宰し、医学、特に脳科学の知識に基づく育児用品の開発に努めておられ、九〇年代からは「心の育児教室」や「あたたかい心を育てる運動」を推進しています。

二〇〇〇年には「国際育児幸せ財団」を設立して育児の教育・環境を国際的に研究し、人間の幸せについての学問的体系を創り上げようと尽しておられます。もともと社会事業に関心が深く、更生運動をライフワークとし、また漫画家の手塚治虫氏が破産したときに救済したことでも知られた方です(巽尚之『鉄腕アトムを救った男』実業之日本社　二〇〇四年)。

その葛西氏が、「あたたかい心をもった保育者を育て、子どもたちに幸せをもたらすような講座を立ち上げたい」と熱望され、保育研究に長い伝統をもつお茶の水女子大学に声をかけて下さったのが発端です。

一方、お茶の水女子大学も平成十六年度から独立行政法人化し、大学経営の体制が変わり、外部資金の導入に関心が強まりました。こうした事情を追い風として、この講座が誕生したといえます。ただし、全く偶然の産物というわけではなく、今から三十年ほど前に、お茶の水女子大学の旧家政学部・児童学科に「幼児教育現職教育」という科目が設置されたことがありました。そのときに、津守眞名誉教授、本田和子前学長、当時の附属幼稚園教頭堀合文子先生、それから私も加わって、現職教育を行っていました。対象は限られていましたが大変評判がよく、九年ほど続いた後、惜しまれながら休講となっていました。本田前学長も、そのとき現職教育の重要さを十分認識されており、今回このような形で再開されたのではないかと想像しております。

――次に、講座スタッフと、今年度の受講者についてご紹介いただけますか。

大戸　専任教員は榊原洋一先生と私の二人で、他にリサーチ・フェローと学外講師を十六人お願いして、五月十六日から始まりちょうど一か月たちました。受講生は原則として現職の保育者を対象とし、さらに保育に関心をもつ一般の人たちも受け入れています。大きな特色は、受講者を科目等履修生とし

て入学を許可し、履修すれば単位を与えることです。それだけに、キャリアアップのためには、大変刺激に富んだ組織的な講座ではないかと思います。

現在、現職保育士二十七名、幼稚園教諭（パートを含む）六名、その他、児童館勤務など保育に関心のある人が二十五名、計五十八名に、本学の学生・大学院生三十四名で初年度総計は九十二名です。年齢は、一番若い方が二十三歳で、最年長が七十二歳と幅広く、園長・主事レベルの管理職から若い保育者まで様々です。ただし、一科目の履修も可能で、全科目を履修する方も数人おられます。

――開講科目はどれも大変魅力的ですね。まず概要をご紹介いただけますか。

大戸　資格取得のための教育課程にとらわれない独自科目が多いのが特色です。

たまたま専任が、小児科医で小児神経学がご専門の榊原先生と、保育現場や国際的な保育のことに多少明るい私ですので、「子どもの病気とそのメカニズム」「乳幼児の発達と脳科学」「保育臨床演習」「比較保育学」を開講しました。発達期の子どもを預かる保育の現場では、子どもの発達や病気に対する実践的な知識が必要です。榊原先生の二つの科目は、最新の脳科学に基づく発達や病気の実践知を身につけるよい学習の機会となるはずです。私の担当科目については、後ほど触れますが「育児環境と工学」も目玉科目のひとつです。アップリカ葛西社が育児工学の専門家を派遣して下さり、安全で快適な育児用品・環境に関する基礎的な知識を学ぶ科目を提供できることになりました。赤ちゃんが横たわって居心地のいい位置や大人が世話をしやすい高さ、チャイルドシートの角度などを勉強すれば、保育室の中に無造作に置かれている「もののあり方や意

味」に注意を払い、教育環境を意識的に調整するヒントが得られるのではないか思います。

さらに、大日向雅美先生、汐見稔幸先生、小西行郎先生など、育児支援・育児行政・赤ちゃん学の第一人者を招き、大きく変わりつつある現代育児の問題点と課題をオムニバスで語り繋いでくださる「現代育児論」、同じく赤ちゃん研究の第一人者である小林登先生には、子どもの幸せについての深い洞察に満ちた「子どもの幸せ学の探究」……。このようなビッグな先生方のお話を連続して聞くことは、めったに得られない機会で、いずれも意義深い授業です。

このほか、絵本・おもちゃ・メディアの最前線の研究を提示していただく「絵本・おもちゃ・メディア研究」、最近問題になっている発達障害の子どもについて学び、保育者自身の障害観を整理し再検討する「障害児保育教育論」、音楽療法について学ぶ「実践音楽表現」、現代食育の理論と実践を学ぶ「保育と食育」やホームページ作りの基礎を学習する「保育者の情報学」も、内容が充実しています。特に、「絵本・おもちゃ・メディア研究」の「おもちゃ」担当の森下みさ子先生は、子どもがおもちゃをどのように受容しているかというユニークな切り口で研究を展開している気鋭の専門家であり、メディア研究担当の坂上浩子先生は、ＮＨＫの子ども番組のプロデューサーとして第一線で活躍中ですので、いずれも興味深い内容がいっぱい詰まった科目です。「食育」と「情報学」は、教育課程の改定後、養成のカリキュラムに取り入れられていますが、改定以前に養成校を卒業された方には学習の機会のない科目です。まさにリカレント科目として用意しました。

それから、これら講義のほかに「保育実践研究」という授業もありまして、専任教官とリサーチ・フェローの三人で、一人につき三人から四人の受講生を担当します。担当者の得意とする領域の中から

各自がテーマを決めて、小児医療の現場へ出かけて現場を観察したり、実践の基礎となるようなアンケート調査や観察法、実験法を実際におこなってみたり、あるいは日常保育の中で気になっている課題を出しあって事例を読み解く作業を進めています。授業の終わりには、受講生全員にむけて研究の成果を発表する予定で、保育者の実践力をパワー・アップする特色ある科目です。

――初めての受講者を迎えて一か月、反応はいかがですか。

大戸　概して熱心です。授業は昼夜開講し、月曜から金曜までは夜間(午後六時二十分から七時五十分まで)、土曜日は昼間(午後二時から三時半まで)です。あっという間に七時五十分になり、余韻を残しながら終わる感じですね。

最近、保育所へのニーズは非常に高まり、いろいろな役割が期待されています。「男女共同参画社会の実現」、「子育て支援」、「地域に開く」というように、子どもと向き合って保育をすること以外にたくさんの要望が保育所に集まってきています。保育士はみんないい人たちですから、社会的要請に素直に応えようと努力するのですけれども、実際にやってみると、どれもものすごく大きな仕事で、みんな「あっぷあっぷ」しているというのが現状ですね。ですから、ひとつ話し始めると、次から次へといろいろなことが出てくるのですね。

――たとえば、現職の保育者の担わされている課題とは、具体的に何があるでしょうか。

大戸　離婚・結婚を繰り返し、子どもを多数抱えながら、自分が生きていくことに精一杯で子どもに関心がない親。身勝手な大人たちとの生活で荒れ狂う子どもたち。子どもたちが安心して楽しく過ごすことができるよう配慮してある保育室にいてさえ、居心地の悪い子どもたちがいて、保育者は「安定して

そこにいる」ことに多大のエネルギーを注がなくてはならないことなど……今の社会、非常に安定して豊かな「勝ち組」と言われる層の人たちがいる一方、生きるということ自体が非常に重い荷物となっている人たちもいて、社会階層の格差が非常に大きくなってきていますから、それだけ保育のサービスが多様化しているということがいえると思います。

――現代の保護者のあり方について、先生は注目なさっているようですが。

大戸　今年の六月、二〇〇四年度の人口動態統計が発表され、晩婚化・晩産化の傾向が更に進んだことが報じられました。「結婚は三十歳前後、子どもは三十代で」というのです。私どもは「晩産化」に注目して、いろいろ調査してきましたが、講座の受講者にも各園の保護者の年齢層について調べてもらったところ、幼稚園の保護者の年齢は、圧倒的に三十代後半が多く、保育園では、三十代前半が比較的多い。父親に至っては四十代が二、三〇パーセントを占めていることがわかりました。

保育者からすると、一口に保護者といっても、その年齢は二十代から五十代まで広がり、親子ほど年齢の違う人たちが自分のクラスの保護者としているわけです。ですから、今の保育者は、保護者の関心、教養、嗜好、所属する世代の雰囲気に応じて、まるで違う対処をしなければならないのです。最近、保育者、特に若い保育者から「保護者の対応が難しい」という声を聞くことが多くなってきましたが、保育者と保護者の年齢のギャップという要素があるのかもしれませんね。「子育てが中年の人たちに担われている」点をしっかり意識して、保育のあり方を考えてみるいい機会ではないかと思っています。

――「中年の子育て」では、何が問題になってきますか。

大戸　大人は四十年生きると四十年の人生のキャリアが身につきます。しかし、子どもは、いつの時代

でも人生の初心者。だから、「キャリアを積んだ人と人生の初心者の出会いの落差」というのは、所得が高い・低いに限らず、今まで以上に大きいのでは、と感じます。以前は、「若くて元気はつらつのお母さんが迷いながら子育てをする」という発想を前提に、保育を考える傾向がありました。しかし、「自分の価値観ができている親」、つまり「分別ある大人」と「無分別な子ども」との葛藤が、今まで以上に大きくなってきているのではないでしょうか。

そこで、私は「保育臨床演習」という授業で保護者に焦点を当て「今どきの保護者って、一体どういう人たちなのだろう、どういう願いをもって、それを自らどのくらい身につけた人たちで、どうすると彼らの養育力をエンパワーできるだろうか？」ということを課題に進めることにしました。

保護者も子育ての重要な当事者です。本来、その当事者能力を側面から支援するのが保育者の仕事でした。ところが、今は保育者に子育てを任せてしまう親が少なからずいますので、保育者たちには、「親にもっと力をつけてほしい」という願いが強いのです。ですから、保護者に最低身につけてほしいものを探し出し、身につけてもらって「一緒に子育てやりましょうよ」という基本姿勢のなかでそれを実現する多様な方法を検討しているところです。中年の子育て当事者に必要な保育支援というのは何か、まだまだわからないことだらけで、毎回手探りで進んでいます。「保護者論」とでも言えるでしょうか。多分こんな取り組みは、初めてだと思いますが。

――そうすると、各国の保育事情に詳しい先生が担当される「比較保育学」も、保育者の支援・親の養育支援という二つの課題に取り組んでいく上で役立ちそうですね。

大戸　「比較保育学」では、日本で今、問題になっていることで、諸外国で既に取り組んでいる事柄を五つ取り上げ、それらが諸外国ではどんな形で展開しているかを紹介していきます。今回取り上げる五つの課題とは、①教育・保育実践の質の向上に向けての取り組み、②野外保育、③長時間保育、④子育て支援プログラム、⑤幼稚園・保育所の一体的運営の五つで、比較検討してみようというのです。例えば④では、北欧、オーストラリア、ニュージーランドなどの取り組みを上げ、日本と違うということを知ってもらいます。海外での子育て支援は、マイノリティー（少数民族や移民）を対象としたものが主流です。ところが日本の支援の対象者は、日本語を話せて、実家も近い、大学も出ていれば、定期収入のある人たちです。日本は、なぜ、このようなマジョリティーの人たちの支援に力を入れなければならないのか、そこを問題提起したいのです。私は、今のわが国の子育て支援に対する反省をこめて、外国とちょっと切り口が違いますよ、ということを提案したいと思っています。

――現職教育が目指す保育・保育士の理想像とは何でしょう。

大戸　保育というのは、いろいろな人や物や事柄が時計の歯車のようにかみ合って動いています。いろいろな関係を見ていって、今、一番しっかり連携していかなければならないのは、保育の当事者である親と保育者が、子どもをめぐって一緒に力を合わせていく、その環境作りが大切ではないかと思っています。一方だけくるくる回るのではなく、保護者とのかみ合わせを、今、見直している最中です。

最近、改めて、保育者の大きさを思います。少子化時代が到来し、身の回りに子どもがいなくなって、大人自体の子どものイメージが貧弱になってきました。こうした時代には、子どもとたっぷり生活している人は保育者しかいなくなってきたのではな

いでしょうか。「子どもについて語れる語り部としての役割」が、現代の保育者にあると思います。路地に子どもがあふれていた時代には、保育者にならずとも、普通の大人がいっぱい子ども情報をもっていました。ところが、今、子どもは限られた場所にしかいませんから、いろいろなタイプの子どもをたくさん見ている保育者は、この少子社会では貴重な存在だと思うのです。ですから、その保育者が子どもについて語ることの意味は、今まで以上に大きい。私は、保育者たちに「大いに語りなさい」と、言っています。「子どもの生態を見て語る」、そういう技を保育の専門性にしてもいい時代ではないかと思うのです。

子どもって、何をやっても時間はかかるし、遊んでしまうし、言ってもすぐに聞かない。保育者は毎日こんな子どもの生態に出会っています。ところがこれから親になる人たちは、こうした子どもの生態を知る機会は少ないし、親になっても子どもを預けて、ほんの数時間しか出会っていないと、子どもの生態を知らないまま過ごしてしまう。そして、「子どもらしさ」に出会うと我慢できなくなったり、許せなかったり、疎ましくなる。中には、育てることさえ放棄しかねない……。少子化というのは非常に根が深いのです。「子どもを産む・産まない」の問題は、経済力や社会的な安定も関係している。それ以上に、家庭を築いて家族が一緒に過ごすことに、居心地のよさが伴わない社会なら、子どもをもつ必要性が弱まります。男女共同参画を実現している北欧では、零歳児保育を殆どしないし、育児休業を男女とも取ります。親が育児の当事者能力を発揮しています。

――この講座の現職教育の意義と目的について最後にもう一度まとめていただけますか。

大戸　現場の人は必要を満たすことに追われて過ごしています。今やらなければならないことに、曖昧

でも何でも、とりあえず直感的に判断して応える。いつもそういう個別性と必要性の中で対応するのが保育者。でも、現職教育は、個別性を普遍性に、必要性に十分条件を付加する努力をする機会だと思います。だから、現職教育では、保育者が必要なことでいかにキリキリ舞をしているかということもわかるし、それが不充分なこともわかるという二重の面白さがあるような気がします。

現職教育の意義は、第一に、保育ニーズの強まりの中で、もち切れないほど大きな荷を負わされている保育者の実態を理解し、「出来ること・出来ないこと」を整理し、支援すること、第二に、保護者の変貌に沿った育児支援のあり方を探求することにあります。三十代後半の仕事となりつつある日本の保育事情を理解し、彼らの養育力をパワー・アップする方法を考える。そんな風にあれこれ考え、今、非常にやりがいを感じています。

来年度からは、常設講座の他に、公開講座を充実させていきたいと計画中です。何十年に一度の大きな保育行政の改革の最中に在って、子どもたちの生活と学習をどのように充実させていくかという保育の基本を守りながら、新しい保育課題、例えば零歳から五歳までの発達と学習の最新情報とか、保育の質を高めるドキュメンテイションの役割と作り方等について学習する特別講座を設け、多くの保育者に公開したいものと希望しています。詳しくは左記にお問い合わせください。

お茶の水女子大学　子ども発達教育研究センター
チャイルド　ケア　アンド　エデュケーション講座
Tel：〇三―五九七八―五九四九
Fax：〇三―五九七八―五九四三
E-mail：yoichi@cc.ocha.ac.jp
（お茶の水女子大学）

インタビュー　平成十七年六月十四日　聞き手　編集部